

植樹式 1998



時の蘇生・柿の木プロジェクト

3 月 28 日		防災広場初音の森（谷中コミュニティ センターから移植） 日本・東京都・台東区		1
4 月 18 日		WHO 本部 スイス・ジュネーブ		2
4 月 20 日		ストラスブール国立高等装飾美術学校 （現在は HEAR ストラスブール統合） フランス・ストラスブール		3

防災広場初音の森 (谷中コミュニティセンターから移植)

🇯🇵 日本

📍 東京都・台東区

🌱 1998 年 3 月 28 日

谷中は古くからの町並みが大切に残され、昔ながらの人と人との交流が今も息づいている町です。1997 年秋に地元のギャラリー CASA で「柿の木プロジェクト活動報告展」が開催されたのをきっかけに「谷中柿の木ネット」を中心として植樹への取り組みが始まりました。展示やワークショップなどを通して次第に柿の木への共感が広がり、放課後に地元の小学生が通うこどもクラブが併設され、地域のさまざまな年代の人々が集う谷中コミュニティセンターでの植樹が実現しました。

植樹式では谷中コミュニティ委員長の浅尾空人さん、谷中三崎町会長の野池孝三さんなど地元の方々、海老沼先生、宮島達男からスピーチがあり、苗木贈呈式が行われました。式典に続き、アーティストの花田ハイケさんとこども達を中心に、東京藝術大学の学生が協力して長崎の伝統的な行事「おくんち」を題材に“被爆柿の木二世”の蘇生と生命のエネルギーを表現したパフォーマンスが行われました。小さなこども達はピアノカのメロディーにのせて、柿の木をぐるりと囲んだ布に水彩で絵を描き、大きなこども達は大正琴の躍動感あるリズムとともに龍を



操りました。植樹後は、柿の木の前でこども達の大好

きなお餅つきが行われ、美味しいきなこあんこのお餅をいただきました。



2002 年秋には柿の木が早々とたわわな実をつけたので、コミュニティ委員会



の「こども未来部」が初めての収穫祭を開催しました。こども達と一緒に干し柿作りをして「被爆柿の木二世」とこども達の成長を祝い、その後も毎年のように収穫祭が行われています。

2008 年 3 月、柿の木は谷中コミュニティセンターの建て替え計画に伴い、お向かいの防災センター広場へ移植され、この広場に集う地域の人々に見守られています。

2014 年 3 月、柿の木の元気がなくなり、樹木医の小池仲男先生によって治療が行われました。この時に新たに、もう一本の「被爆柿の木 2 世」も植樹されました。

谷中防災コミュニティセンターの子どもたちも参加してくれました。治療を受けた柿の木も、その後は元気に成長しています。

WHO 本部

🇨🇭 スイス

👤 ジュネーブ

🌱 1998 年 4 月 18 日



スイス・ジュネーブにある国連の専門機関・世界保健機構（WHO）の記念イベントとして、1998 年 4 月～1999 年にかけて国際美術展「意識の縁（ふち）」展が開催されました。そのオープニングに先駆けて、1998 年 4 月 18 日、WHO 本部前庭に「被爆柿の木二世」が植えられました。この植樹は柿の木プロジェクトが、この展覧会で里親募集を兼ねる展示を出品していたことをきっかけに、展覧会の企画者であったアデリーナ・フォン・フルステンベルクさんを中心に実現したものです。

植樹式では、海老沼先生、海老沼仁美さん、WHO のクライセルさん（保険衛生・環境担当部長）によるスピーチに続き、長崎知事、長崎市長のメッセージも紹介され、長崎市長から「平和の鐘」が贈られました。苗木は集まってくれたジュネーブの子ども達がそれぞれの手にスコップを持って植えてくれました。植樹の後、アデリーナさ

んの呼びかけでイタリアから駆け付けてくれたアメリカ人バイオリニスト、マイケル・ガラッソーさんが「柿の木のためのオリジナル曲」（作曲：同氏）をバイオリンで演奏してくれました。繰り返されるメロディが美しく、変化していくこの曲は、参加した多くの人の心に強く残りました。

展覧会期間中は、前庭に植樹された柿の木の後ろに「柿の木ボード」が設置され、美術展に参加したアーティストや美術関係者、ジュネーブ市民によって自由にメッセージが書き込まれ、大勢の参加で白いボードが真っ黒になりました。

同展は、この後 1998 年 9 月アメリカ・ニューヨーク国連本部、1998 年 12 月ブラジル・サンパウロ、1999 年 3 月インド・ニューデリーと巡回し、柿の木プロジェクトの里親募集の活動も同時に行われました。

ストラスブール国立美術学校 (現在は HEAR ストラスブールに統合)



フランス



ストラスブール



1998 年 4 月 20 日

海外植樹申し込み第1号として「被爆柿の木二世」が長崎からフランス・ストラスブールに渡りました。きっかけになったのは、1996 年 4 月、フランスのカルティエ美術財団で開催された宮島達男の展覧会です。オープニングパーティーで宮島は、カトリーヌ・グルーさん（美術史家）に出会い、進行中の柿の木プロジェクトについて話しました。以前から都市と自然に関する様々なアートプロジェクトに参加してきたグルーさんは、宮島の話に非常に関心を持ちました。2人は核戦争、核実験、そしてアートに関していろいろと貴重な意見交換をして、後日グルーさんから宮島はあるプロジェクトを紹介されました。そ

それはグルーさんが企画しているストラスブールにおけるアーバンデザインのプロジェクト（1997 年 6 月）でした。宮島と柿の木プロジェクト実行委員会とで話し合った結果、グルーさんのプロジェクトがストラスブール市の職員、日本領事館、ヨーロッパ領事館関係者に紹介されたところ、予想以上の反響がありました。しかし結局このグルーさんのプロジェクトでは、苗木を

植樹できませんでした。

その後、ストラスブールでの植樹に結びつくまでには、たくさんの人たちが関わってくれました。この苗木のことをグルーさんから聞いたストラスブール在住のアーティスト、ミッシェル・クリーガーさんは「戦争中もドイツとの国境だったために戦火の中心となったストラスブールに“被爆柿の木二世”を！」という熱心な呼びかけ

を行ってくれました。そのミッシェルさんの熱意は街全体に広がっていき、結果、市や植樹先となった美術学校の人々を動かしました。

1998 年 4 月 20 日の植樹の当日、ス

トラスブールを訪れた実行委員会のメンバーは街中の人たちから歓迎を受け、この苗木のために動いてくれた人たちの力を感しました。

1998 年 4 月 20 日の植樹の当日、ストラスブールを訪れた実行委員会のメンバーは街中の人たちから歓迎を受け、この苗木のために動いてくれた人たちの力を感しました。

